

「ふん、雑魚どもが……」

鉄の匂いがする。

汗混じりの血と磨き上げた鎧から漂う、冷たい金属臭。

アマリア・アイアンウォールは、その匂いを肺の奥まで吸い込むと、荒い吐息と共に吐き出した。

「こんなんじゃ、肩慣らしにもにもなりやしねえや」

彼女の足元には、今しがた斬り伏せたばかりのオークどもの死体が転がっている。

ある者は分厚い刃で頭蓋を叩き割られ、またある者は首から先を失い、胴体は腹を裂かれて内臓を撒き散らした無惨な姿を晒している。

アマリアの大剣が薙ぎ払うたびに、命などただの一撃で、まるで藁のように断ち切られていった。

「……ま、小遣い稼ぎにゃなるか」

そう呟いて薄く笑うと、刃を振るい、大剣の刃に付着した黒い血飛沫を床に叩き落として鞘に納める。

それから、倒した敵の所有物を軽く物色し始めた。

武器の重厚さとは対照的に、鎧は軽装だ。

胸元を大きく露出した、いわゆるビキニアーマー。

腹も脇も、太腿も、日に焼けたうっすらと残る古い傷痕だらけの肌が剥き出しになっている。

厚い鉄板で覆われているのは、肩から上腕にかけてと、脛と足首のみ。

要するに、関節と四肢の端さえ守ればいいという、彼女独自の哲学が現れていた。

『防具なんざ、当たらなきゃ意味ねえし。そもそも、無駄に重てえ防具なんぞを着けてるから、そのせいで当たるんだよ』

彼女は常日頃から、そう豪語している。

実際、アマリアの戦い方は攻撃こそ最大の防御という言葉の体現だった。

敵が攻撃を繰り出す前に斬る。

斬られれば避ける。

避けきれなければ耐える。

彼女の肉体は鍛え上げられた筋肉の鎧に覆われ、かすり傷程度ならば、まるで蚊に刺された程度にしか感じない。

二つ名の「アイアンウォール」とは、鎧の分厚さではなく、彼女自身の肉体の頑強さを評した言葉だ。

百七十を超える長身、男をも凌駕する筋肉の躍動、荒々しい気性。

酒場で男たちと腕を競い、勝ち、そして彼らの羨望と恐怖を等しく受け止めてきた。

アマリアに言い寄る男はいなかった。

いや、いたにはいたが、みな彼女の拳か言葉のいずれかで叩きのめされて、退散していった。

『男なんざ、どいつもこいつも碌なもんじゃねえんだよ』

そう吐き捨てて鼻で笑い、独りで酒を煽る。

それがアマリアの生き方だった。

「ふん。こんなもんか」

オークたちの遺体から金目の物を剥いだ彼女は、先に進んだ。

今では冒険者たちのメッカである迷宮都市オルバースの地下、第七層までソロで到達している彼女は、同層でも屈指の女戦士として知られていた。

この深さにまで単身で潜るなど正気の沙汰ではないと囁かれながらも、彼女は今日もただ一人で、迷宮の深淵に挑んでいる。

そしてその日、彼女はついにさらなる下層、第八層へ下る階段に到達したのだった。

「ヘッ。やっぱり、大したことなかったじゃねえか」

単身で第七層の踏破など無謀だと口々に言っていた連中の驚く顔を思い浮かべて、アマリアはにやりと口元を歪める。

「どこの誰だ？ 俺に、この程度の迷宮が突破できないなんて言った野郎は」

ここまでに遭遇した敵もザコばかりだったし、まだまだ余裕がある。

ギルドに戻る前に、この下の階層がどれほどのものか、軽く確かめてきてやろう。

そう考えて、アマリアは軽く装備を整え直すと、ごく軽い気持ちで目の前の階段を下っていった――。

・  
・  
・

第八層の空間は、それまでの石造りの迷宮とは明らかに異なっていた。

壁はねっとりとした蔦に覆われ、床には深紅の苔が生えている。

天井から吊り下がった果実のようなものが、ぱくりと口を開けて、甘い蜜を垂らしている。

「ふーっ……」

アマリアはこの階層で何度目かの戦いを終えて、小休止をとった。

「……さすがに、ちったあ歯応えが出てきたな……」

そう、独り言ちる。

第七層まででは姿を見なかった凶暴なモンスターもいるし、これまでも見かけたような魔物も群れを成す数が多くなっている。

とはいえ、まだまだ切り抜けられないというほどではない。  
「これがこの階層の手応えか。……ヘッ、相手にとって不足なしってトコだな」

『——おやおや？ その程度の連中で不足なしだなどとは。それでは先が思いやられるね？』

「っ！」

突然、どこからともなく聞こえてきた声に、アマリアははっとする。

急に空気が変わった。

湿った土の匂いが消え、甘く、重い香りが漂ってくる。

花のようだが、花ではない。

肌にまとわりつくような、粘膜を撫でるような、奇妙に粘ついた感じのする香り。

「……魔物か。どこにいやがる……」

アマリアは大剣を構え、警戒しながら周囲を見渡した。

『ここだよ』

目の前の空間に、突然、声の主が姿を現す。

「なっ……」

「ようこそ、新参の戦乙女さん」

それは、ただの男と呼ぶには、あまりにも美しい存在だった。

長い銀髪が波打ち、赤みがかった琥珀色の瞳が、ゆらりとアマリアを見据える。

肌の色は陶器のように白く、薄い唇が微かに笑んだ。

彼が身に纏っているのは、闇そのものを布にしたような質感のない黒衣。

それが彼の肢体に沿って、揺蕩うように垂れ下がっている。

「インキュバス、……ってやつか？」

アマリアは脳内で自身の持つ魔物の知識を手繰り、そう判断した。

淫魔。

女を惑わし、精気を喰らう悪魔。

迷宮の第七層までには出現しなかった、高位の魔物だ。

「いかにも。初めまして、お嬢さん。僕の名は……」

「斬るッ！」

アマリアは男の言葉を待たずに地を蹴り、大剣を振り上げた。

迷いはなかった。

いつものように、一撃必殺で片を付ける。

たとえそれが対峙したことのない、得体の知れぬ相手であろうとも、いやだからこそ、なおのこと速やかに倒さねばならぬ。

だが、その刃が男の首元に届く直前、彼は笑った。

ただ、笑っただけだった。

なのに——

「……っ！？」

その途端に、アマリアの体が、ぴたりと動きを止めた。

いや、何かによって止められたのだ。

(なっ、なんだっ……？)

大剣が空中で静止する。

腕が動かない。

足も動かない。

指一本、まぶた一枚、動かさない。

まるで透明な琥珀に封じ込められた虫のように、彼女は剣を振上げた姿勢のまま固められた。

武技一辺倒のアマリアの知識など、所詮は浅いもの。

インキュバスのようなめったに遭遇しない高位の魔物については名前程度は知っていても、その能力や対処の仕方、そもそも自分に対処できる相手なのかどうかといったことは、まるで把握しきれていない。

「……せっかちな、君は。時間をかけて愉しむということを知らないのかい？」

男はそう言って笑ったまま、ゆっくりと歩み寄ってきた。

歩くたびに黒衣の裾が揺れ、彼の足元から甘い香りが立ち上ってくる。

「どうやら、君は直上の第七層を、単独で踏破してきたようだね。すばらしいよ。肉体的には、申し分なく強い」

(離れろ……化け物め……！)

アマリアは怒声を浴びせようとした。

口が動かない。

歯を食いしばり、何とか腕を動かそうとした。

筋肉が痙攣する。

血管が浮き上がる。

だが、びくともしない。

「無駄だよ」

男はアマリアの目の前に立った。

身長差はほとんどない。

「噂は聞いていたよ。アマリア・アイアンウォール。ここ最近、迷宮に単身で挑んで第七層にまで到達している、勇ましい女戦士がいると」

至近距離で見つめ合う。

琥珀色の瞳が、揺らめく炎のように、彼女を映している。

「君の強さは認める。本当に強い。でもね——」

男の白い指が、アマリアの頬に触れた。

「あ……っ！？」

触れられた瞬間、電流が走った。

いや、電流ではない。

熱いもの。

とろりとした、ねっとりとした、甘い熱が、触れられた箇所から皮膚の下に染み込んでいく感覚が、体の髄を流れたのだ。

「——君はまだ、本当の自分のことを、何も分かってはいない」

「……っ」

アマリアは身震いした。

まだ動けない。

なのに、皮膚の下で何かが蠢いている。

熱い。

いや、ただ熱いのではない。

——疼く。

体の奥が、熱く疼く。

「君はずっと、強くあろうとしてきたのだろう。男に負けないように。男に屈しないように。でも、その強さが、本当に君の望むものかい？」

男の指が頬から首筋へ滑り落ちる。

喉をなぞり、鎖骨の窪みで円を描くように動いた。

「……やめ……ろ……」

かろうじて動いた口から、ほとんど聞き取れない、かすれた弱弱しい抗議の声が漏れた。

だが、目の前の男はそんなものを気にも留めない。

「君はただ、自分の弱さを恐れているだけだ。傷つくことを恐れているだけだ。肉体的にではなく、精神的に。だから、誰も近づけない。誰も愛さない。誰にも愛されない——」

そう囁きかけながら、指を鎖骨から下へ。

ビキニアーマーの露出した胸元へと、滑らせていく。

「君の体は、ずっと叫んでいたよ。一目見ただけで分かった。誰か触れてくれって。誰か抱いてくれって。誰か愛してくれって——」

「……ち、ちが……う……」

「違うさ」

男の声が、耳の中に直接響くようだった。

いや、耳だけではない。

頭の中に。

心の中に。

体の芯に、声が染み込んでいく。

言葉が溶け込んで、拒絶しようとする意志を融解させていく。

「君は女だ、アマリア。強く美しい上辺をもつ女だ。そして——その内側で、欲している女だ」

男の指が、露出した胸の谷間をなぞった。

ほんの一撫で。

ただそれだけの愛撫で、アマリアの体の中で何かが決壊し

た。

「あっ——！」

ようやく、かすれていない声が出た。

拒絶の声ではない。

喘ぎだった。

自分の口から出たとは思えない、甘く、熱い喘ぎ。

アマリアは自分の声に驚愕した。

この体は、こんな声が出せる体だったのか。

自分は、こんな声を出す女だったのか。

「ほら。君の体は知っている。女であることを。男が欲しいことを」

男は笑った。

底知れぬ危険な昏さと淫靡さを湛えた、それでいて優しく、慈しむような笑みだった。

「僕が教えてあげるよ。君が、本当に欲しているものを——」

喘ぎが喉から漏れた……ということは、もう呪縛は緩んでいる。

完全に解けているのかもしれない。

だが、アマリアは剣を振るわなかった。

振るえなかった。

いや、振るいたくなかった。

(体の奥が、熱い……っ)

先ほどからじわじわと体を蝕んでいた熱と疼きは、今や灼熱の奔流となって、全身を駆け巡っている。

膝が震え、腰が砕ける。

呼吸が荒くなる。

(お、俺……、欲情、してる……?)

アマリアは、初めてそれを自覚した。

これまで三十二年間、女として生まれながら、女としての欲求を知らずに生きてきた。

いや、知ろうとしなかった。

認めようとしなかった。

それを弱さだと、恥だと思い込んで、目を背けてきた。

「……なにを、した……？」

「なにも。封印を解いただけだよ。君が、自分で自分にかけていた封印をね」

男——インキュバスは、アマリアの大剣をその手から奪い取った。

彼女はただそっと指を引き剥がそうとする動きに、抵抗しようとさえしなかった。

重厚な金属が床に落ちる音が、やけに遠く聞こえる。

「さあ。今は、剣はいらない。今の君に必要なのは、戦う力じゃない」

男の手が、アマリアの帯びる部分鎧の留め金に掛かった。

留め具が外され、重い鉄板が床に落ちる。

一つずつ、彼女を守っていた鉄壁が剥がされていく。

最後に、胸と腰を覆う皮のビキニだけが残った。

「自分で、外してくれるかい？」

男はそう囁いた。

命令ではない、誘いだ。

甘い、抗いがたい、淫魔の誘い。

「あ……あ……」

アマリアの手が動いた。

震えながらも、ゆっくりと胸のビキニに手をかけ、外す。

白い胸が露わになる。

腰の部分も同様に外し、床に落とす。